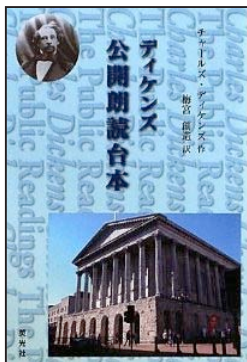


書 評
REVIEWS



チャールズ・ディケンズ (著)
梅宮創造 (訳), 『ディケンズ公開朗読台本』
Charles DICKENS, *Charles Dickens: Public Readings*,
trans. by Sozo UMEMIYA
(274 頁, 英光社, 2010 年 9 月, 本体価格 2,600 円)
ISBN: 9784870971387

(評) 松本靖彦
Yasuhiko MATSUMOTO

ディケンズはもっと声に出して読まれるべきだ —
そして、もっと聞かれるべきだ。そう改めて確信されたのは、昨年 (2010 年) 師走に東京杉並の衍芸館で催された「グローブ文芸朗読会」で、佐藤昇氏をはじめとする 6 人の役者さんたちによる『クリスマス・キャロル』の朗読を耳にしたときだった。台本 (公開朗読用台本ではなく小池滋訳を適宜短くしたもの) を手にした読み手たちが、めまぐるしく互いの立ち位置を入れ替えながら台詞と語りを交し合う、緊迫感のある朗読劇だった。

これは深い作品理解に裏打ちされ、緩急と明暗の対照がみごとな、実に質の高い朗読で、演出にも演技にも 2010 年 12 月現在の「今・ここ」でディケンズ作品に体当たりしてやろうという気概と新鮮味が感じられた。ほぼ時を同じくして聞いた BBC Radio7 のラジオドラマ『クリスマス・キャロル』(Michael Gough や Freddie Jones が出演している 2009 年版) よりもはるかに優れた内容だった。原作をしっかりと咀嚼しつつも「今・ここ」での「リアルな」表現を追求したこの公演は、朗読がディケンズのテキストに文字通り息を吹き込む様を目の当たりにさせてくれた。『クリスマス・キャロル』の魅力は独りで黙読していてもわからないのではないかと感じたほどだった。

この優れた「グローブ文芸朗読会」を軌道にのせた立て役者が、日本におけるディケンズ公開朗読研究の第一人者であるだけでなく、自ら長きにわたってディケンズ作品の朗読を実践してこられた荒井良雄氏であり、近年公開朗読台

本の精力的な翻訳によって、この朗読会を含めたディケンズ作品の朗読活動を牽引してこられたのが、その成果の一部を本書『ディケンズ公開朗読台本』という形にまとめられた梅宮創造氏である。

『ディケンズ公開朗読台本』には「ナンシー撲殺」、「バーボックス商会」、「ドクター・マリゴールド」、「デヴィッド・コパフィールド」、「ピクウィック裁判」、「炉端のこおろぎ」の公開朗読台本6篇が収められている。台本集ではあるが、もちろん読み物のアンソロジー、つまりは短編小説集としても楽しめる本であり、日本語で味わえるディケンズ節の世界の幅を^{ぶし}上げた意義は大きい。とりわけ「バーボックス商会」と「炉端のこおろぎ」の読みやすい日本語訳が入手可能になったことに快哉を叫びたい。「ディケンズは『クリスマス・キャロル』を翻訳で読んだだけですが、あれは面白かった。ディケンズっていいですね！」などと言ってくる奇特な人々——確かに実在する！——に上述の2篇のクリスマス物を収めた本書を『クリスマス・キャロル』が大好きなら、こういうお話はどうでしょう？」と紹介できるようになったからである。

また、本書の巻頭を飾る「ディケンズと公開朗読」という梅宮氏の論考も重要である。末尾の「主要参考文献リスト」も含めて、ディケンズの公開朗読に関する基本的情報をひととおり提供してくれる有益な資料になっているだけでなく、訳者の梅宮氏をディケンズ公開朗読の研究と朗読台本の翻訳へと駆りたててきたある疑問が吐露されているからである。それは、ディケンズはなぜ身を削り、命を削るようにしてまで自作の朗読にのめりこんだのか、という多くのディケンジアンが共有している問いである。「あとがき」によれば、梅宮氏はこの問いに対してある仮説をたてていて、その仮説を実証するための作業がディケンズ公開朗読台本の翻訳なのだという。果たしてその仮説が実証されたのかどうか梅宮氏は本書中でははっきりとは述べておられないが、ある程度の手ごたえは得られているものと思われる。

このように単独でも有用な本書ではあるが、梅宮氏の『ディケンズ公開朗読台本』に関して何より重要なことは、これがあくまで「朗読台本集」であり、これ一冊で自己完結してしまうのではなく、広く一般読者に向けて、また今後のディケンズ鑑賞・研究に向けて「開かれた」本であるということだ。このことを2つの点から指摘したい。

まず、本書は「日本でも朗読を通じてもっと多くの人にディケンズを楽しんでもらいたい」という意図から荒井良雄氏が始められた「日本（語）ディケンズ朗読計画」とでも呼ぶべき大きな文芸プロジェクトの一環として捉える必要がある。良い朗読のためにはまず良い台本がなければならず、荒井氏の主導のもと日本語でのディケンズ朗読台本作りが地道に続けられてきた。声に出し

て読まれ、聞かれることを目的とした翻訳の作成である。その成果の1つが2006年に出た『ディケンズ朗読短篇選集』（小池滋編著、北星堂）であり、新たな成果が梅宮氏による本書である。ディケンズが遺した全21篇の朗読台本の完訳を目指したこの翻訳作業は続行中であるし、本書も梅宮氏が翻訳した朗読台本のすべてを取めているわけではない。上述の朗読プロジェクトの中での位置づけからしても、梅宮氏の功績の全体から見ても、本書はそれらのごく一部を伝えているにすぎないのである。この本一冊でも楽しめるが、あくまで部分であり完結してはいない。上述した「仮説」に対して梅宮氏が決定的な結論を下していないのはそのせいかもしれない。

また、台本であるからには、本書は公演の場で分かち合われるべき筋のものであり、読み手によって適宜改変を加えられながら活用されていくものであり、閉じたテキストとして扱われるべきではない。本書に収められた台本はいずれも佐藤氏によって朗読にかけられたものばかりであり、その読みやすさは既に検証済みである。こなれた訳文だが、読み手や聞き手によっては、これでもまだ分かりにくいと感じる箇所があるかもしれない。たとえば、ある朗読会の打ち上げの席上、その日佐藤氏が朗読された梅宮訳「バーボックス商会」中の「妄念」（92頁）という訳語について、聴衆の中にいた役者さんたちが梅宮氏ご本人に手厳しい意見をぶつけているのを目撃したことがある。書き言葉は字面が見えるので、黙読するには妥当な表現でも、耳で聞くとすると意外な違和感を生じることがあるのが朗読台本の難しさであろう。また、「デヴィッド・コパフィールド」でペゴティおじさんが姪のエミリーについて語る台詞の「うちのエミリーってのはね……家んなかにきらきら輝く小さな目がなきゃ、どうにもならんちゅう、まったくそういうやつでして」（139-40頁）という箇所も、このままでは理解しにくいと思われる。このような場合、元の英語表現から多少離れた訳をしても構わないのではなからうか。

確かに、原文への忠実さをとるか、耳で聞いたときの分かりやすさをとるか、判断が難しい局面もあったと思われる。本書では「もっと思い切って原文への忠誠をかなぐり捨て、大胆な意識をした方が分かりやすいのではないか」と評者が愚考する箇所でも、梅宮氏は比較的原文に忠実な訳を試みておられる。これは、後々朗読者が適宜本書の台本に自由な改変を加えて読むのを許すにしても、まずは Philip Collins 編の *Charles Dickens: The Public Readings* に収められた21篇のテキストに匹敵する、ディケンズ公開朗読台本の日本語版定本を拵えておきたいという梅宮氏の気概の表れであろう。

その一方で、梅宮訳独自の工夫とアレンジも散見する。たとえば、「ドクター・マリゴールド」に出てくる大男ピックルソンが歌う戯れ唄 'Shivery Shakey,

ain't it cold?」を梅宮氏は「おお寒、こ寒、しばれるね」(115頁)と訳されているが、評者の私見ではこれに優る訳はない。また、「バーボックス商会」を原文で読むと、幼いポリーがませた口調で中年男のジャクソンを翻弄している印象が強いが、梅宮訳は「ちゅがう！そんなじゃなァい」(85頁)のように彼女の幼さを取えて訳文自体に埋め込んだ。結果としてポリーのあどけなさが強調されるが、同時にそのあどけなさにはだされるジャクソンの姿も鮮明になる。これはテキストに盛り込まれた演出といってもよいだろうが、佐藤氏の朗読では大きな効果を上げていた。

台本に限らず、英語の語りを日本語に移そうという翻訳者は、まず適当な文体(口調)の選択を迫られることになるだろうが、この点で興味深かったのが「炉端のこおろぎ」の文体である。梅宮氏は本書所収の6篇のうち「家庭のおとぎ話」である「炉端のこおろぎ」だけは「です、ます」調で訳し、そこに時折「……ですな」という口調を加えて訳文に独自のリズムを生み出そうと工夫されている。これは、梅宮氏が朗読者の佐藤昇氏とタッグを組んで翻訳をしてこられたことと関係があるかもしれないが、評者としてはこの一篇くらいはそのまま女性のナレーターが読んでもいいように、より中性的な口調にとどめておいてもよかったのではないかと思う。

なぜこういうことを言うのかというと、評者は本書をはじめとしたディケンズの日本語朗読台本が、いずれ佐藤氏を含めたいろんな役者さんたちの朗読でCD化され、少なくとも『クリスマス・キャロル』くらいは毎年師走に(たとえば)NHK ラジオドラマとして放送される、というような状況を想像しているからである(個人的に「炉端のこおろぎ」を読んで欲しいと思う女優さんの名前は複数挙げるができる)。しかし、朗読は何といっても生が良いので、さまざまな形の朗読会(ディケンズ+和物の朗読、あるいは講談や落語と組み合わせたってよいではないか)が開かれ、ディケンズが読まれる機会がもっと増えるとよいと思う。ディケンズ作品の朗読は研究者たちにも多くの発見をもたらすはずだ。日本におけるディケンズの朗読プロジェクトは、まさにこれからが本番、これからが進化のしどころなのである。本書がその中核となることは間違いない。